初期俳諧集

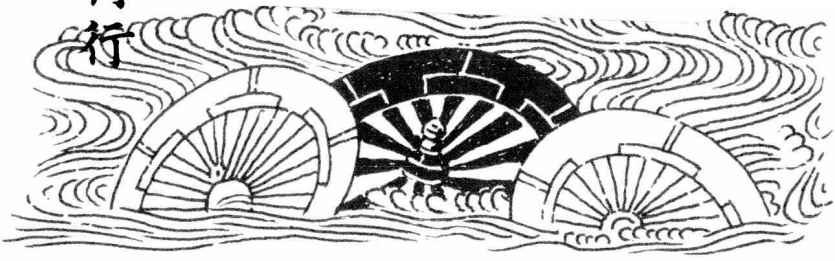
新日本古典文学

新日本古典文学大系 69

初期俳諧集

森川昭
加藤定彦 校注
乾裕幸

岩波書店刊行



初期俳諧集　新日本古典文学大系 69

一九九一年五月二〇日　第一刷発行©

定価 四二〇〇円
（本体四〇七八円）

校注者　森川昭　加藤定彦　乾裕幸

発行者　安江良介

発行所　〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三-三二六五-四二一一（案内）

印刷・大日本印刷　製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-240069-7

凡　例

一　底本には、各集の善本を採用した。底本については解題に記した。

二　翻刻本文の作成にあたっては、底本の原形を重んじるようにした。

1　底本に存する振仮名は、底本と同じく片仮名で残した。

2　底本の仮名遣いが歴史的仮名遣いに一致しない場合もそのままとした。

3　反復記号「〻」「〻」「〳〵」については、底本のままとし、読みにくい場合は、平仮名で読み仮名を傍記した。

三　翻刻本文の作成にあたって、底本の原形に対して、基本的に改訂を加えたのは、次の諸点である。

1　本文における連句の表記は、『犬子集』では底本のままとし、『大坂独吟集』『談林十百韻』では、長句・短句の区別を明らかにするため、長句に対して短句を一字下げて記し、その構成を知る便りとした。

2　本文には、適宜、句読点、「　」等を施した。

3　本文における漢字は、常用漢字表にあるものについては、その字体を使用した。異体字・古字・俗字・略字の類も、原則として通行の字体に改めた。

4　底本の片仮名表記は、特に意図的と思われるもの以外は平仮名に改めた。

5　仮名はすべて、現行の字体によった。

6　本文の漢字書きに、適宜、平仮名で読み仮名を施した。

7　清濁は校注者の判断により、これを区別した。

8　底本において明らかに誤りと思われる文字は、当時の慣用と思われるものまたは当て字以外はこれを改め、脚注で言及した。

9　同じく誤刻と推定される文字は訂正し、脚注で説明した。

四　本文の句番号は、本書における通し番号である。

五　脚注は、次の順で記した。

『犬子集』

発句（一―一五三）　一・二・三…　語注、▽句意・解説、季季語

付句（一五四―二六七）　季（季語）、一・二・三…　語注、▽句意・解説、付付筋（付合、または寄合を文献によって示した）、俳俳言（『藻塩草』を参照して判定した）

なお、記号→は縁語、＝は掛詞の意。

『大坂独吟集』

句の位置、季（季語）、○語注、▽句意、判宗因判詞

『談林十百韻』

句の位置、季（季語）、○語注、▽句意

六　『俳諧類船集』は頻出するので（類）の略号を用いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七　作者およびその他の人名の解説は、巻末に人名索引を付載し、簡単な解説を加えた。

八　脚注・解説文中の連俳用語については、付録「連句概説」を参照されたい。

九　各集の前に解題を掲げた。

十　校注の分担は左記の通りである。

『犬子集』　発句（一―一五四三）　森川　昭

付句（一五四三―二六七一）　加藤定彦

『大坂独吟集』『談林十百韻』　乾　裕幸

目次

凡例……iii
犬子集……三
大坂独吟集……二八五
談林十百韻……四二九
付録
連句概説……乾裕幸……五六六

解説

初期俳諧の展開……乾　裕幸……五七五
過渡期の選集……加藤定彦……五九六

索引

人名索引……43
発句・連句索引……2

犬子集

森川昭
加藤定彦
校注

〔成立〕俳諧と連歌とは、貞徳が『俳諧御傘』(慶安四年(一六五一)刊)の自序に「抑はじめは誹諧と連歌のわいだめなし」と述べるように源流を一にしていた。このことは、代表的な連歌選集『菟玖波集』(良基編、延文元年(一三五六)成)巻十九の雑体連歌(誹諧ほか)に徴しても明らかである。心敬や宗祇が活躍した頃になると、二つは完全に分離・発展し、当時の連歌選集『新撰菟玖波集』(宗祇ら編、明応四年(一四九五)成)から俳諧等の雑体は排除され、俳諧は俳諧で別個に『竹馬狂吟集』(編者未詳、明応八年成)の選集が編まれる。晴と褻の両面から享受者の要望に応えたのである。それから三、四十年後、俳諧の鼻祖とされる宗鑑・守武が活躍、宗鑑は自他の詠吟を拾って『誹諧連歌抄』(天文八年(一五三九)以前成、通称「犬筑波集」)を編み、守武は史上初の独吟千句『守武千句』(天文九年成)を成就している。しかし、以後の約百年間、俳諧の道は戦乱のためほとんどが言捨てにされ、絶え絶えの状態であった。徳川氏の治平後、ようやく盛んとなって来たのを好機に、当代の句を中心に編集・刊行したのが『犬子集』である。

寛永八年(一六三一)、重頼と親重は、貞徳を顧問に戴き、作品の蒐集に着手した。ところが、同集による限り、俳壇の現状は一都五地方に一七八名の作者を数えるに過ぎず、しかも、京の五十一名に対し、守武以来の伝統をもつ伊勢山田は百名を擁し、すでに選集『伊勢俳諧大発句帳』さえ編まれていたらしく、京を完全に圧倒する先進性を誇っていた。その他、徳元著『塵塚誹諧集』(未刊)・為春著『犬俤』(同)などの諸家の句集や独吟連句・紀行などを材料に編集は進んだが、途中で意見が衝突、ついに重頼は、寛永十年(一六三三)、単独で刊行したのである。

〔底本〕早稲田大学図書館蔵の初版本を底本とした。初版は大本五冊で、構成は巻一―巻六(第一冊―第二冊)が四季の発句と句引、巻七―巻十七(第三冊―第四冊)が四季・恋・神祇・釈教・雑の付句・魚鳥付・誹諧・百句付ほか、第五冊には巻数を付けず、「上古誹諧」として『菟玖波集』から貴顕や名家の作品を抜粋、俳諧の伝統と権威を強く印象づけている(「近年之聞書」を付載)。彫工は京の時宗寺、大炊道場の存故で、当初は私家版であった。刊行後、大反響を呼び、横本五冊の流布版二種が書肆により売り出され、俳諧流行の端緒となった。

（犬子集　一）

夫誹諧は昔より人のもてあそぶ事世〻にあまねし。されどもさかんにをこる事は、中比伊勢国山田の神官に荒木田守武、又山城国山崎に宗鑑とて、此道の好士侍り。かゝる時よりぞ事あらたまりけるとなん。されば守武は独吟に千句をつらね、宗鑑は『犬筑波』をしるして、世〻の形見とぞなし侍る。然るにこれらの人もなくなりて以後は、此道すたれたるにや、たえ〳〵云捨のみとぞ聞え侍る。しかはあれども、今此御代やしまの外迄もおさまり、国土安全にして民の竈もにぎはふ折からなれば、高き賤によらず諸道をおこす故に、誹諧も又さかんにしてけり。然れば云捨のみに過なん事も、且は其興をうしなふにやと、古人の例にまかせて愚筆を染ぬ。則『守武千句』・『犬筑波集』右之両本に入たるはのぞき、其後之発句・付句其様宜しく聞えけるを、身づから書集て或古老

〔序文〕

○荒木田守武　文明五年（一四七三）の生、天文十八年（一五四九）の没。享年七十七。伊勢神宮内宮禰宜。宗長・宗牧らの指導のもとに連歌を学び、兄弟・一族の人々とともに伊勢連歌壇の中心的存在となった。天文九年（一五四〇）、史上初めての独吟俳諧千句『守武千句』を完成し、宗鑑と並んで俳諧の始祖とされる。

○宗鑑　本名、支那弥三郎範重。天文八年（一五三九）または九年の没。享年八十前後。将軍足利義尚または義輝に仕えた。主君の没後に出家し、山城国の薪・山崎などに隠棲した。宗祇・宗長・肖柏ら当代の代表的連歌師とも交流したが、『誹諧連歌抄』（通称「犬筑波集」）の編者として著名で、守武とともに俳諧の始祖とされる。

○好士　傑出した人物。

○やしま　日本国。

○民の竈　庶民の生活。仁徳天皇の国見のときの詠歌「高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどは賑はひにけり」（和漢朗詠集、新古今集ほか）による措辞。

○或古老　『玉海集追加』の貞室自跋によれば、松永貞徳。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

之披見に入、用捨の詞をくはへ、そゞろに此一集となし、是を犬子集と号侍る。抑 比は寛永八年如月より此かた二とせあまりに国〻所〻より到来の句をもつて、同十年睦月半に記終ぬ。しかるを『犬子集』といふ事、『犬筑波』をしたひて書たる故也。凡発句の数は一千五百三十、付句はこれかれ千句に余る。誠 此道に心をよする事切なるによりて、今行末の人口、ことには神慮のとがめをも恐ざるに似たり。されども和光同塵は本より結縁の初とかや。しからば是非をもゆるし給ふべし。返〻も世上のはゞかり其嘲は、ありそ海の浜の真砂の数しらずなん思ひしかども、よし〳〵本より愚なる身のおもひ出に、なにはの事をもかへりみず、只水茎に任せつゝ、種は尽せぬ言の葉の、ちりひぢ高き、足引の山鳥の尾のしだりおの、なが〳〵しくも書つゞけ侍る。

○用捨　取捨選択。「詞をくはへ」は、添削の上、入集させた句を念頭に置いた言廻しか。

○和光同塵　仏菩薩が衆生を救うため、本来の威光をやわらげ、仮の姿をこの世に現わすことをいう。「結縁」は仏道修行の道に入り、成仏の因縁を結ぶこと。「和光同塵結縁之始。八相成道以論二其終一」(摩訶止観六・下)による。

○是非　善悪。ただし、ここでは悪に重点がある。

○ありそ海　荒磯海。「我が恋はよむとも尽きじありそ海の浜の真砂はよみ尽くすとも」(古今集・仮名序)のたとえ歌による。「ありそ海の浜の真砂の」は、「数しらず」を引き出す序詞の役割をする。

○なにはの事　「何はの事」。諸事万端。万事。

○水茎　筆。

○種は尽せぬ　「青柳の糸たえず、松の葉のちりうせずして、正木のかづらながく伝はり、鳥の跡久しくとゞまらば、…」(古今集・仮名序)を踏まえる。

○ちりひぢ高き　「たかき山も、ふもとのちりひぢ(塵泥)よりなりて」(古今集・仮名序)による表現で、「足引の山鳥」の「山」にかかる。

○足引の…　「足引の山鳥の尾のしだりお(尾)の」全体で、「なが〳〵し」を引き出す序詞。

狗猾集題目録

春部

元日　第一
梅
残雪
木目
春草
春月
雉子
桃花
桜
辛夷
茶花
蕨
永日
春郭公
若菜　二
鶯
春氷
柳
土筆
春鷹
蝶
杏子
桜鯛
海棠
躑躅
菫
藤
蛙
暮春
子日　三
霞
春雨
松若緑
若和布
帰鴈
椿
花
梨花
小米花
款冬
喚子鳥
雑春

狗猫集巻第一

春上

元日

1 春立やにほんめでたき門の松　徳元

2 ありたつたひとりたつたる今年哉　貞徳

3 礼義とてかざりわらにもはかまかな　愚道

古年に雨ふりければ

4 去年は雨日本晴やけふの春　春可

申のとしに至りて

5 去年よりもまさる目出度今年哉　慶友

6 年も人もそだつはじめはむ月哉　宗恕

7 うたひ初は人より先かとりの年　道職

1 ガンニチ・ガンジツ両様のよみがある。▽春立つ＝門松が立つ。日本＝二本。春が立ち日本国中めでたく新年を迎え、家々の門には二本の門松が立つ。巻頭句にふさわしく句柄の大きい句。塵塚誹諧集の寛永六年（一六二九）以降発句のうち。功用群鑑に「門松や二ほん目出たき御代の春」。季春立つ・門の松。

2 一感動詞。普通は蹴鞠（けまり）の時に発する掛声。▽春が立つ＝子が立つ。今年＝子。知人の子のひとり立ちするようになったのを祝った句。横本上五「あつたつた」。季今年。

3 一飾藁。正月に玄関や床の間などに飾る藁の作り物。二植物の茎をまとい覆う皮。それに人の着る「袴」を掛ける。▽礼儀→袴。新年の礼儀作法として、人間ばかりでなく飾藁もちゃんと袴を着ている。季かざりわら。

4 一去年の歳末。二今日の春。新春を祝っていうことば。▽雨→晴。雨と晴の対照、晴と春の類似音。季けふの春。

5 一寛永九年壬申の年か。慶友（卜養）二十六歳。▽目出たさが増さる＝申。季今年。

6 一睦月（むつ。正月）。「襁褓（むつ。おむつ）」を掛ける。▽一年の初めは睦月、人の一生の初めには襁褓。季む月。

7 一謡初。新年に武家の家で能役者を招いて謡曲の謡いはじめをする儀式。徳川幕府初期は正月二日、承応三年（一六五四）からは正月三日で、これがすまぬうちは諸家で謡曲を謡うことができなかった。▽そこで酉の年を擬人化し、世間の人が謡曲を謡うことができぬうちに酉年が始まり、鶏が鳴いた、すなわち謡初をした。この酉年は寛永十年か。季うたひ初・とりの年。

8 ▽鶏＝酉。春来ることを告げるかの如く鶏が鳴く。そういえば今年は酉（とり）の年である。季春・とりの年。

9 一「年」にかかる枕詞。二年頭。新年。三舞楽の常装束に用いる冠り物。鳳凰の頭をかたどる。▽年の頭＝人の頭。酉年の年頭、人の頭には鳥甲をかぶる。季あら玉の年。

10 一玉打。毬（まり）を槌状の杖で打つ子供の遊び。毬打（まりうち）。▽改まる＝あら玉＝玉打。今日は年も改まり、子供たちは毬打の玉を打って遊んでいる。季改年・玉打。

11 一白鑞（かう）の鏡。白銅製の鏡。▽餅は白＝白鑞の鏡＝鏡餅。鏡餅を白鑞の鏡に見立てる。当時の鏡は円形。季かゞみ餅。

8 春のくる時を告るやとりの年　休音
9 あら玉の年の頭や鳥甲　興之
10 年もけふあら玉うてる子共かな　春益
11 むかひ見る餅は白みのかゞみ哉　親重
12 四方に春立はだかれる日足かな　利清
13 老て今朝二たび児のむ月かな　貞継
14 今朝いはひ去年のしはすやのし肴　正直
15 数の子は二親をいはふ年始哉　氏重
16 福の神を今日のせ来るやむまの年　良徳
17 けふの春笠きてたつか天下　長吉
歳徳亥子の方なりければ
18 米俵をえ方はいねの間かな　一定
19 草も木も目出たさう也けふの春　良春
20 日のかほや今朝あかねさす申の年　政昌
21 山は雪そりやさも候へけふの春　一之
22 門に松は今朝来る春の奏者哉　重次

12 一日脚。昼間の時間。また、日ざし。▽春立ち＝立ちはだかる→日脚。東西南北すみずみまで春が立ち、暖かい日ざしがさしている。季春立つ。
13 一諺「老いて二たびちごになる」。老いると子供にかえる。▽睦月(むつ)＝襁褓(むつ)。人の一生は襁褓に始まり襁褓にかえるが、一年も睦月に始まり睦月にかえる。季む月。
14 一駄斗肴。儀式用の肴とした駄斗鮑(だあわ)。鮑の肉を薄くはぎ、ひきのばして乾かしたもの。▽師走＝皺(むし)→伸す＝駄斗肴。今朝は駄斗肴で新年を祝い、去年の師走の苦労の皺をのばす。季去年・のし肴。
15 一大勢の子供。それに食品のカズノコを掛ける。▽数の子＝カズノコ→鰊(にし)＝二親。新年大勢の子供たちが父母の壮健を祝う。一家繁栄のさま。季数の子・年始。
16 一福徳を授けるという神。＝寛永七年か。▽今日はうま年の新年だが、きっと福の神を乗せて来るだろう。歳旦発句集に上五「福の神」。季むまの年。
17 ▽天下＝雨が下。今日は天下に春が立つが、「天下」はアメガシタつまり「雨が下」だから、春も笠を着て立つことだろう。季けふの春・春たつ。
18 一陰陽道で、一年の吉方(うらえ)すなわちその年の最もよい方角を司る神。又その神のいる方角。＝亥子の方角は亥と子の間すなわち真北から西へ十五度寄ったところ。▽米俵を得＝吉方。亥子＝稲。米俵すなわち財宝を得ることができる吉方は、稲に縁のある亥子の方角だ。季え方。
19 ▽草も木も芽を出す＝めでたい。草も木も芽を出しそうなめでたそうな新年だ。季けふの春。
20 一茜さす。赤く照り映える。▽茜→猿の顔。申年ゆえ初日の色も猿の顔の如く赤い。寛永九年作か。季申の年。
21 一そりやさも候。狂言の決まり文句。それはその通りです。▽さも候＝寒う候。山にはまだ残雪があることゆえ、新年とは言えそりゃ寒いことです。季けふの春。
22 一将軍・大名などに拝謁の取次ぎをする者。▽門松を新年の訪れを主に取次ぐ奏者に見立てる。季門松・今朝の春。

23 師走たち正月きたる小袖かな　正信
24 めぐり来る年はひつじの車哉　政重
25 しめ縄は去年と今年のさいめ哉　常勝
26 年明てひらかぬ梅や古暦　正友

寛永七年午の年なりければ

27 寛永やあけ七歳のむまの年　玄札
28 けふさくは年づよなれや花の兄　望一
29 四国より来る春なれや申の年　正重
30 をしあけて今朝来る年のさる戸哉　成安
31 いむ事はけふきかざるの年始かな　一正
32 申がへり見てや立来るとりの年　真利
33 我朝に立や小国のとりの年　長之

年内立春の心を

34 今朝の春は鸚鵡返しかとりの年　正章
35 天筆やかすみをそめて和合楽　重頼
36 大上戸東にあるか西ざかな

23 ▽時が経ち＝布を裁ち。正月来たる＝着たる小袖。師走が過ぎ正月が来て、師走のうちに裁ち縫った小袖を着る。季正月小袖。

24 一羊に引かせる車の意か。▽めぐり来た新年は未の年だけに羊の車のめぐる如く長閑である。季来る年・未の年。

25 一境目。▽新年を明示する注連縄を去年と今年の境目に見立てる。季しめ縄・去年今年。

26 ▽暦のない山中で梅花の開くのを暦代りにすることを梅暦というから、年明けても開かぬ梅は古暦だ。季年明く・梅。

27 一馬の年齢の数え方。新年を迎えて七歳になること。▽明け七歳の馬＝午の年。季むまの年。

28 一年強。数えの年齢で、その年の前半の生れであること。＝他の花に先がけて咲く梅の異称。▽梅花を擬人化し、一年のうち早く咲くところから年強といった。季花の兄。

29 ▽日本猿の異称を四国猿というところから、今年の申年は四国から来たかと興じた。季来る春・申の年。

30 一猿戸。戸締り用の猿というしかけを設けた戸。▽戸を開ける＝年が明ける。猿戸＝申年。猿戸を押し開けるように、年が明けて申年がやって来た。季来る年。

31 一忌む事。不吉な事。▽聞かざる＝申の年＝年始。めでたい新年には不吉なことは避ける。季申の年・年始。

32 一猿返。曲芸の一種。▽猿返りを見物していた人が立去るように申年が過ぎて酉年が来た。季年立つ・とりの年。

33 ▽「小国」は自国を謙遜していう語。また鶏の異名でもあるので酉の年と縁語になる。季年立つ・とりの年。

34 一人の言葉をそっくりに言い返す。▽年内立春と新年と二度同じことをくり返す。季今朝の春・とりの年。

35 一天帝の筆蹟。天筆和合楽は舞楽・万秋楽の異名。新年の書初めの文句。▽天帝が霞に書初めをする様か。季かすみ。

36 一大酒飲み。＝西肴。螺肴。新年の祝儀に用いる肴。▽西肴の語があるからには大上戸が東にいるのだろう。誹諧発句帳など中七「東にありや」。季西ざかな。

37 一物まう。客が案内を乞う語。＝どちらから。主のことば。▽新年の到来を客と主の挨拶に擬す。誹諧発句帳は上五

37 ものまうはどれから来るぞけふの春

38 物いはで立来る年やさる轡

39 世界をやけふ籠の内のとりの年

40 先立や梅が香をかぐはなの春

元日屠蘇白散の心を

41 けさ汲やとそつ天よりたつかすみ

42 来る春は何を荷なふぞ三が日

43 春のきて去年は何所へ申の年

44 しめ縄や春をもくゝる戌の年

45 三方につみしをいかに西ざかな

46 年もひつじ紙だくさんに試筆哉

47 きそ初してやいはゝん信濃柿　貞徳

48 霞さへまだらにたつやとらの年　同

49 大こくの持やつちのえ辰の年　同

50 梅も先にほひてくるや午の年　同

51 けさたるゝつらゝやよだれうしの年　同

「物んまう」、作者以重。季けふの春。

38 ▽申年＝猿轡。声も立てずにやって来る申年は猿轡をさせられているのだろう。季来る年。

一今日此の内。昨今、近頃。▽今日此の内＝籠の内→とり。世間が今日酉年の新年になった。季とりの年。

39 一横本「さきたつ」と振仮名。＝花の春。花やかな新年。▽

40 鼻＝花の春。新年早々梅の香を嗅ぐ。花の春ならぬ鼻の春だ。季梅・はなの春。

41 一新年の健康を祝って正月に飲むもの。＝兜率天。仏教でいう弥勒の浄土。▽屠蘇＝兜率天＝天。自然現象の霞＝酒の意の霞。屠蘇→霞。元日の朝屠蘇白散を汲みかわし、空には霞が立つ。まるで兜率天のようだ。季とそ・かすみ。

42 ▽新年の擬人化。荷＝二、三が日＝三荷、の掛詞から二・三の数字遊びか。季来る春・三が日。

43 ▽去る＝申の年。新年が来て去年の申年はどこへ去ったか。又は申年になって去年はどこへ去ったか。季春来る・去年。

44 ▽犬＝戌の年。縄→くくる→犬。戌年に飾られた注連縄を縁語・掛詞でいいなした。季しめ縄・戌の年。

45 一神仏や貴人に供する物を乗せる台。＝西肴。三六参照。▽三方に乗せた物を、どうして一方だけを意味する西肴というのか。無理問答。季西ざかな。

46 一横本傍訓「しゆひつ」。▽羊は紙を好み食う。未年の新年だけに紙をたくさん用いて試筆をする。季未の年・試筆。

47 一着衣初。正月三が日のうち吉日を選んで新しい着物を着始めること。＝信越・東北で栽培される柿。柿は正月の飾り物に用いる。▽着衣＝木曾→信濃。季きそ初。

48 ▽虎＝寅年→斑。寅年だけに霞までも斑に立つ。季霞・年立つ・とらの年。

49 一大黒天。七福神の一。米俵の上で打出の小槌を持つ。▽槌＝戊辰(つちのえたつ)。寛永五年(一六二八)の作。季辰の年。

50 ▽匂ひ＝荷負ひ→午(馬)。歳旦発句集は上五「梅もけさ」。崑山集は上五「梅もけふ」。季梅・午の年。

51 ▽丑年の元旦に垂れ下った氷柱(つらゝ)を牛の涎に見立てる。季うしの年。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com